考古学・いろ・色

第19回平城京展

―出土遺物の色彩と輝き―

開催にあたって

奈良市教育委員会では、毎年、平城京跡を中心に発掘調査を実施しています。発掘調査で、土中から出てくる遺物は、しばしばその当時の色を保っており、驚かされることがあります。しかし、土中から出してしまうと、またたく間に色褪(あ)せて、当時の色彩は失ってしまいます。考古学は、「モノ」（遺跡・遺構・遺物）を扱う学問で、「モノ」の属性は形と色とで説明できます。ところが、色については残りにくいため、これまでの考古学の世界では形にこだわってきた感があります。

今回の展示では、少し色にこだわってみたいと思います。もちろん、当時の色をそのまま残したものはありません。しかし、当時の色を想像してみたら、これまでとは違った歴史の色に気がつくかも知れません。

なお、今回の展示を開催するにあたり、御協力いただいた関係機関各位に心より感謝申し上げます。

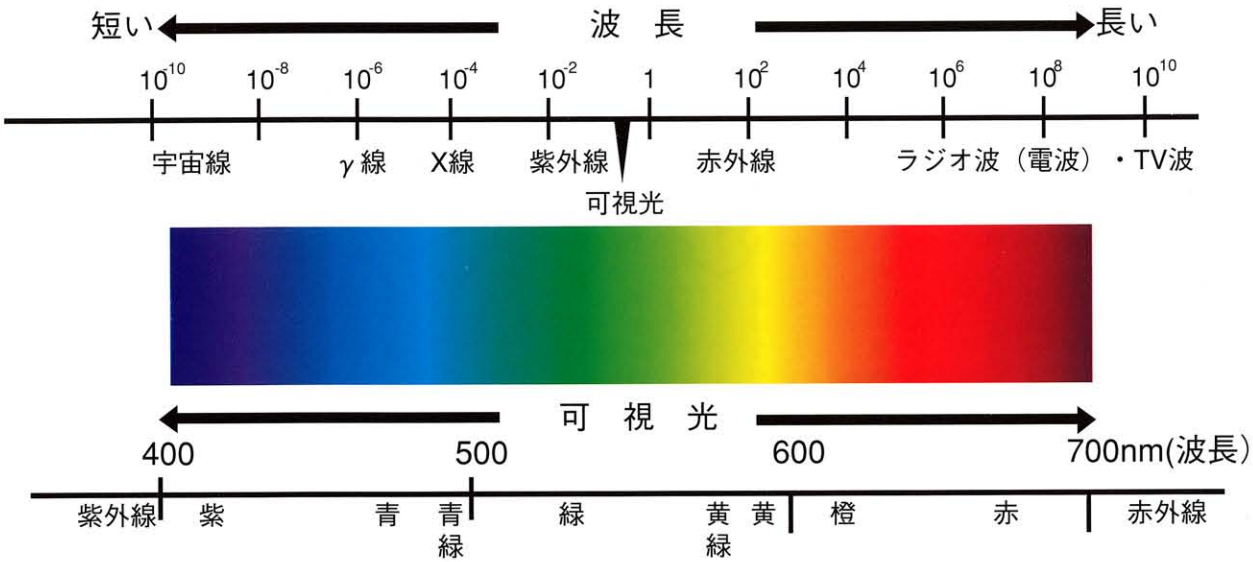
平成13年11月1日

奈良市教育委員会
教育長　冷水　毅

例　言

1. この冊子は、平成13年11月1日から12月28日まで、奈良市埋蔵文化財調査センター展示室で開催する第19回平城京展「考古学・いろ・色—出土遺物の色彩と輝き—」の解説パンフレットです。
2. 奈良県立橿原考古学研究所及び同附属博物館、田原本町教育委員会の各機関には出品の御協力をいただいた。また、展示パネル及び本書で使用した写真の一部には、奈良県立橿原考古学研究所及び同附属博物館から提供を受けたものがある。
3. 展示、及びパンフレットで表示した顔料名は、一部を除いて、宮内庁正倉院事務所　成瀬正和氏に分析を依頼した結果に基づいている。
4. 本書の編集・レイアウトは、埋蔵文化財調査センター職員の協力のもとに、森下浩行がおこなった。

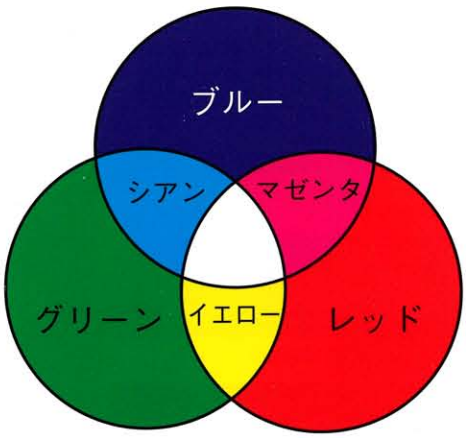
表紙：三彩瓦の紋様



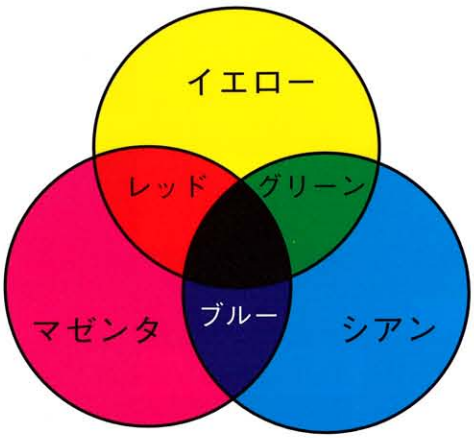
色とは？

『ファウスト』を書いたドイツの文豪ゲーテは、有能な色彩学者でもありました。その著書『色彩論』では、色彩を生み出すためには、光と闇、明と暗、光と光ならざるものが要求されると語っています。それは、あたりまえのようですが、光の無いところには色がなく、光があるところに色があるということです。ゲーテの最後の言葉「もっと光を」は、色彩学者らしい言葉といえるでしょう。その色彩を生み出すための光は、電磁波の一部であり、目に見える光（可視光）の波長は限られています。夕立ちの後の虹や子供の頃遊んだプリズムの光を思い出して下さい。虹は、5色とか7色とかいわれますが、実際は赤から紫まで漸次的に変わっていっているので、色彩名の数を数えることはできないのです。これが私達の見ることのできる光であり、色なのです。

ところで、波長の異なるブルー（青）、グリーン（緑）、レッド（赤）の色光は、その強弱と混合によりどの色も再現できることから「光の三原色」と呼ばれます。カラーテレビの色は、この原理を応用したものです。また、イエロー（黄）、マゼンタ、シアンの色材は、白色光のもとで、濃淡と混合により、どの色も再現できることから、「色材の三原色」と呼ばれます。カラープリンターの色は、この原理を応用したものです。



光の3原色（加色混合）



色材の3原色（減色混合）

日本書紀
巻五　崇神天皇九年三月
赤盾八枚赤矛八竿をもって墨坂の神を祀れ
また黒盾八枚黒矛八竿をもって大坂の神を
祀れ
巻七　景行天皇十二年九月
下枝には八尺瓊を挂りかけ、また素幡を船
の舳に樹て　…

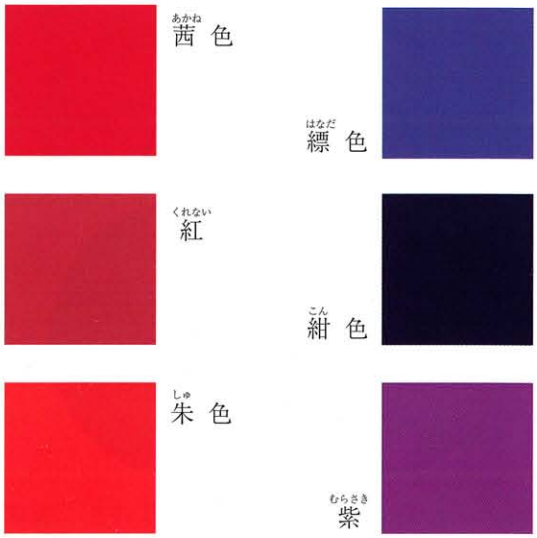
万葉集
巻二
二五〇　…　形見に置ける　みどり児の
乞ひ泣くごとに　…
巻三
三二八　あをによし寧楽の京師は咲く花の
にほふがごとく今さかりなり
巻一二
二九九三　紫の綵色の蘰はなやかに
今日見る人に後戀ひむかも
巻一四
三五六〇　真金吹く丹生の真朱の色に出て
いはなくのみぞ吾が戀ふらくは
巻一六
三八八八　奥つ國領く君が染屋形
黄染の屋形神の門渡る
巻一九
四一三九　春の苑紅にほふ桃の花下照る道に
出で立つをとめ

古代の色彩感覚

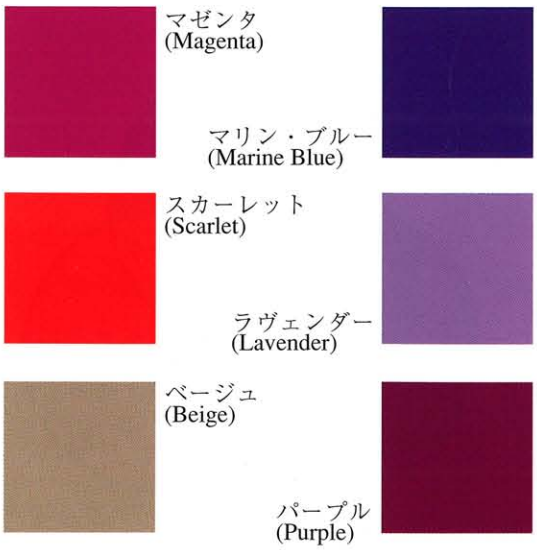
古代の色名は、現在の色名と同じとは限りません。現在では色名を表しているのに当時では色とは全く別の意味で扱われていることもあるようです。

奈良時代くらいまでに認識できた色は、「あか」「くろ」「あお」「しろ」の4つであるといわれています。「あか」と「くろ」は対になって使用され、「あか」は明るい、「くろ」は暗いという明るさの度合いから色名が生まれたようです。『日本書紀』にも「赤盾」「黒盾」や「赤矛」「黒矛」といった対比した表現があります。「しろ」は、「白鹿」「白鳥」（『記紀』）からわかるように、神秘的・聖なるものを表しているようです。また、「素（しろ）」という表現は、「稲羽之素兎（いなばのしろうさぎ）」（『古事記』）のように色相を表すのでは無く、本来のそのままの色という意味で使われています。「あお」は、もともと白・黒・赤を除く色彩すべての表示であったといわれています。色名が分化して、青や緑、青緑などの青系統の色を指すようになり、現在では「青」を表すようになったようです。このほか、「みどり」は未熟さを表すもの、「き」は不吉なシンボルとして扱われており、もともとは色彩名では無かったようです。

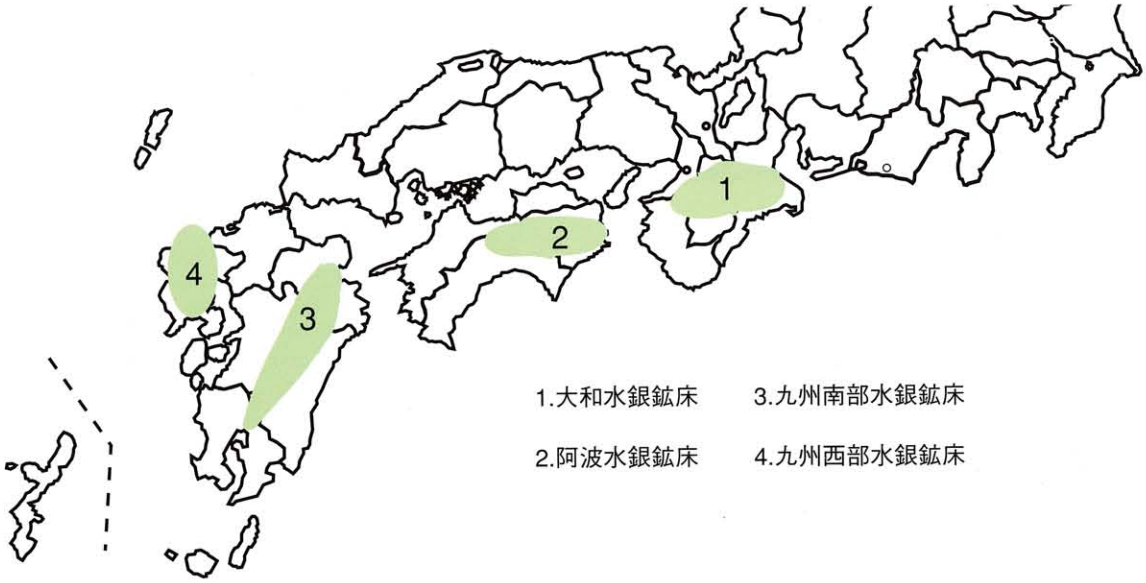
現代では、古くから使われていた色名と西洋などから入ってきた色名が多種多様に存在しており、これもまた複雑といえます。



日本で古来から使われていた色名



海外から入ってきた色名
（色名はともに『配色ハンドブック』池田書店参考）



彩 色

「モノ」の色には、素材そのものの色と着色された色とがあります。着色料には、水溶性の染料と不溶性の顔料があります。染料は繊維を染めるものですが、水に溶けやすいため、土中では非常に残りにくいものです。それに比べると、顔料は残りやすく、出土状態が良ければ完全に残っていることもあります。古代の顔料には、赤・青・緑・黄・白・黒がありましたが、最も頻繁に使用されたのが、赤色顔料です。古代の赤色顔料には、水銀朱・ベンガラ（酸化鉄）・鉛丹の3種類がありました。『万葉集』にも「真赤土」「真朱」といった表現がみられます。このうち、水銀朱の産地は、伊勢・大和・紀伊・阿波・豊後といった地域に限定されています。大和では、『万葉集』に「大和の宇陀の真赤土」、『古事記』に「宇陀の血原」といった表現がみられます。また、宇陀では近年まで水銀鉱山があり、この地域が古代でも水銀朱の産地であったことは間違いないものと思われます。

また、水銀朱には別の利用法がありました。それは、水銀の融点が低いのを利用して鍍金、金メッキに使用されたようです。これをアマルガム鍍金法と呼びます。『万葉集』には、「真金吹く丹生の真朱」という表現もあり、当時から鍍金に水銀が使用されていたことがわかります。

種類	法隆寺	上淀廃寺	高松塚古墳	九州装飾古墳
赤	ベンガラ 朱 鉛丹	ベンガラ 朱 鉛丹	ベンガラ 朱	不純なベンガラ
黄	黄土 密陀僧	黄土 密陀僧？	黄土	黄色粘土
緑	緑青	緑青	緑青	緑色岩石粉末
青	群青	群青	群青	
白	白土	白土	不明（下地漆喰）	白色粘土
黒	墨	墨	墨	炭素 マンガン鉱物

古代の使用顔料（『日本の美術400　美術を科学する』から）

赤漆を塗った縄紋時代の弓（奈良市青野町出土）　上：側面、下：弓腹

縄紋時代の色彩

旧石器時代の日本列島では、色の認識を示す事象は、みあたりませんが、縄紋時代には、赤漆と黒漆が頻繁（ひんぱん）に使用されており、赤と黒の認識があったと思われます。赤漆は赤色顔料を漆に加えたものです。漆製品には、櫛や弓などの漆塗木製品、籃胎（らんたい）漆器（しっき）・木胎漆器（もくたいしっき）、赤彩土器・土製品・土偶などがあります。漆製品の出土は、東日本が中心で、西日本では少なく、一部の遺跡から出土しています。奈良市青野町の調査で出土した赤漆塗の弓は、西日本でも数少ない例の一つです。儀礼などに用いられた飾り弓と考えられています。

赤彩土器（山添村広瀬遺跡出土）
[奈良県立橿原考古学研究所提供]

弥生時代の色彩

縄紋時代から引き続き、赤と黒とが認識されています。また、新たに青銅器が出現し、人々はその輝きに惹（ひ）かれたようです。

土器　前期の北九州及び近畿地方にみられる彩紋（さいもん）土器は、黒地に赤を彩色しています。また、木製短甲（たんこう）にも赤と黒の彩色がみられます。ですが、この時代は縄紋時代よりも赤が強く認識されていたようで、赤彩土器は九州～東北地方に広く分布がみられ、中期の九州では、焼成前にベンガラを塗った「丹塗磨研（にぬりまけん）」土器が墓前祭祀に使用されています。後期になると、東海地方では白地に赤彩を施した「パレススタイル」と呼

赤彩耳飾り（御所市玉手遺跡出土）
[奈良県立橿原考古学研究所提供]

管玉（奈良市芝辻遺跡・菅原東遺跡・宮山4号墳）

銅・錫の混合比と合金の色

錫（重量%）	色
0～5	赤い銅色
5～17	赤味を帯びた黄色
17～20	灰黄色
20～24	白と黄の斑色
24～31	赤味を帯びた黄色
31～40	赤味を帯びた灰色
40～47	銀白色

（『日本の美術400　美術を科学する』から）

ばれる土器がみられます。

また、埋葬施設（甕棺や石棺）の内面にも赤色顔料が塗られることがしばしばあり、集落などからは、水銀朱の精製の道具である石杵・石臼や「朱付着土器」が出土します。化学分析の結果、水銀朱に砒素を伴うことから神仙思想における「仙薬」を調合したのではないかという説もあります。

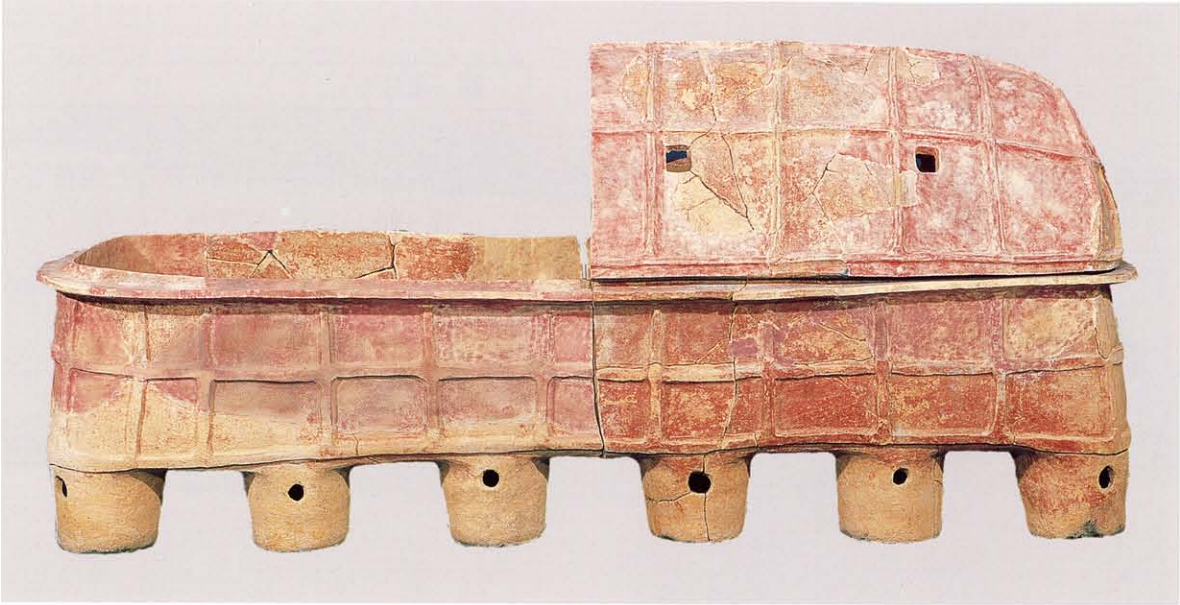
玉　主に碧玉・緑色凝灰岩で作られた緑系統の玉と、ガラス製の青系統の玉が大半を占めます。鉄石英や瑪瑙などの赤系統の玉は少数です。『魏志』東夷伝倭人条にみられる「青玉」は、碧玉・緑色凝灰岩、あるいは翡翠製の緑系統の玉であったものと思われます。このような青・緑系統の玉が多くを占める傾向は、古墳時代中期くらいまでみられます。

青銅器　銅の合金は、含まれる他の金属の割合で色調が変化しますが、青銅は、銅と錫の合金で、銅に対する錫の配合比によっては金色に近くなります。青銅器は、金色の輝きを求めて作られたものと思われます。この時代の金製品は福岡県の志賀島出土の金印が知られているのみですから、青銅器の輝きは、当時、最も光り輝くものであったと思われます。青銅器は、祭祀の道具として使用されており、銅剣・銅矛・銅鐸は山裾や土坑に埋納され、九州では銅鏡を墓に副葬しています。青銅器の色というよりも、輝きに惹かれたのかも知れません。

赤彩紋土器（田原本町唐古・鍵遺跡出土）田原本町教育委員会
［奈良県立橿原考古学研究所提供］

復原銅鐸
［奈良県立橿原考古学研究所附属博物館提供］

赤色（ベンガラ）が塗られた土師質亀甲形陶棺（奈良市赤田1号横穴墓出土）

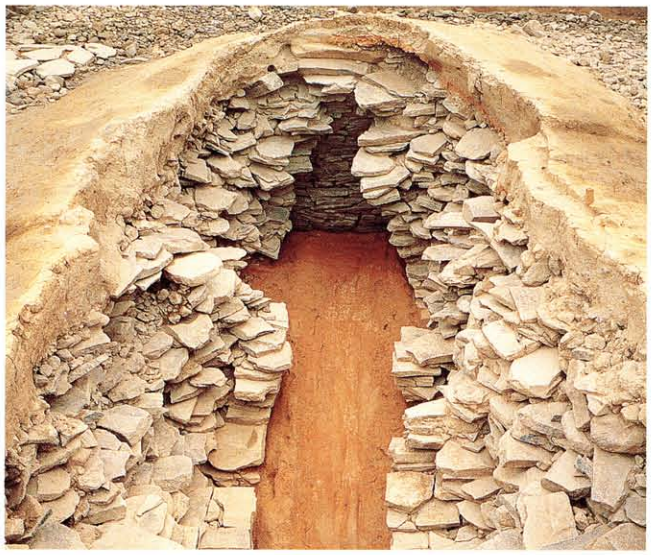


古墳時代の色彩

古墳時代は、赤色と金属の輝きが重要視されていたようです。

埋葬施設　前期の竪穴式石室から後期の横穴式石室まで、埋葬施設の壁面やその内部に置かれた棺に赤色顔料が広く使われています。また、石室の被覆土（ひふくど）などの埋葬施設の上面や埋葬施設の築造過程での祭祀にも使用されています。奈良市北方の丘陵で出土した土師質亀甲形陶棺（きっこうがたとうかん）には赤色顔料（ベンガラ）が塗られていました。赤い色には、僻邪（へきじゃ）・魔よけの意味があったようで、死者を黄泉（よみ）の国へつつがなく送り届けるという葬送観念があったものと思われます。

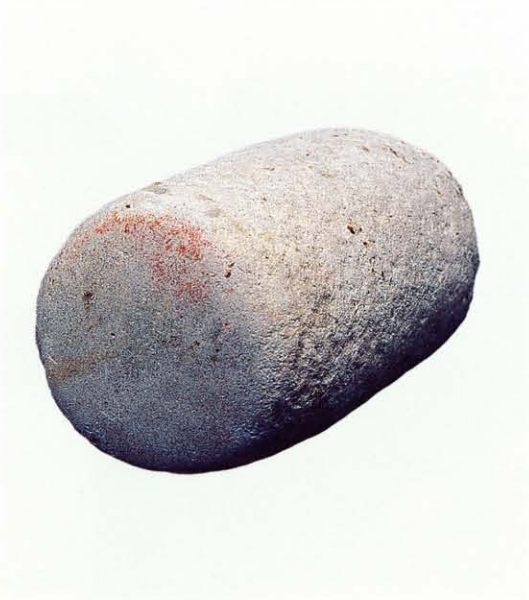
埴輪・土器　『古事記』では、土師器や埴輪を「赤土（はに）」で作ると表現されているように、これらにはもともと赤の概念があったようです。特に祭祀に使用されたと思われる土師器には赤彩があります。また、円筒埴輪の中には、窯焼きの際にうまく赤が発色しなかったのでしょうか、焼成後に赤色顔料を塗っているものがあります。ただし、すべてに塗られているわけではありませんので、塗られた埴輪には何か特別な意味があったのかも知れません。形象埴輪には、紋様の一部として、赤色顔料が使われており、赤以外にもわずかですが、緑・白・黒が使われたものがあります。



竪穴式石室の被覆土（天理市下池山古墳）
[奈良県立橿原考古学研究所提供]

赤彩（ベンガラ）のある円筒埴輪（奈良市杉山古墳出土）

朱の付いた石杵（奈良市柏木遺跡出土）



ベンガラが入っていた土師器甕（奈良市ヤイ古墳出土）

赤色顔料の副葬　奈良県宇陀郡榛原町の谷畑古墳は、前期の古墳で、ここには赤色顔料の板状素材が副葬されていました。宇陀の地域は水銀朱の産地でもあり、朱の生産を統括していた首長の墓かも知れません。中期の大阪府アリ山古墳では、壺に朱を入れて副葬しており、奈良市法蓮町で発見された後期の小形前方後円墳、ヤイ古墳では、赤色顔料（ベンガラ）の入った土師器甕がくびれ部の周溝に置かれてありました。墳丘に立っていたと思われる埴輪に塗られたものかもしれません。

他地域に目を向けますと、宮崎県の地下式横穴では、朱玉と呼ばれる、ベンガラを丸い餅状にしたものが副葬されています。

石杵・石臼　古墳時代も赤色顔料を精製する道具として、石杵・石臼が集落から出土しますが、これらは古墳の副葬品にもなっています。赤色顔料を使った祭祀が、具体的な道具である石杵・石臼までも祭祀具化したものと思われます。

銅鏡　近畿では、銅鐸にかわって、銅鏡の使用が多くみられます。天理市黒塚古墳などでは、埋葬された棺の周囲を囲むように副葬されています。鏡の輝きには、赤色と同様に、僻邪・魔よけの意味があったのでしょう、死者を黄泉の国へつつがなく送り届けるという葬送観念に通じる使用法です。

復原三角縁神獣鏡（橿原市新沢千塚500号墳出土）
[奈良県立橿原考古学研究所附属博物館提供]

鏡の出土状態（天理市黒塚古墳）
[奈良県立橿原考古学研究所提供(阿南辰秀氏撮影)]

緑色凝灰岩製合子（奈良市井上町出土）

車輪石・石釧（奈良市菅原東遺跡・柏木遺跡・二条町出土）

緑色の石製品　古墳時代前期では、碧玉や緑色凝灰岩製の腕輪形石製品（鍬形石・車輪石・石釧）や合子などの宝器、玉などが古墳に副葬されます。この緑色の宝器もまた、川西町島の山古墳のような出土状態を考えると、僻邪・魔よけの意味があったようです。しかし、中期頃になると、緑へのこだわりはなくなっていくようです。

金銅製品　中期になりますと、金・銀が、銅よりもより光り輝くものとして出現しますが、金製品は、勾玉、金糸、耳環などの一部にみられるのみです。ほかの多くは鍍金で、「金銅」「鉄地金銅張り」と呼ばれる製品です。馬具や刀装具、装身具に多く使われています。この時期には、赤色の使用、特に水銀朱の使用が減り、ベンガラが多くを占めるようになりますが、これは鍍金の際に水銀を使用するようになったため、顔料に使われる量が減ったのかも知れません。

壁画その他　後期になりますと、横穴及び横穴式石室の壁画紋様に赤・黄・青？・緑・白・黒が使われるようになりますが、壁画のモチーフ・紋様は、死者を黄泉の国へつつがなく送り届ける葬送観念と関係があり、前期から変わっていないようです。このように古墳時代後期になりますと、色の多様化が始まり、ガラス玉には、黄・赤・緑・青のもの、埴輪・石枕・陶棺には、赤・緑・白・黒の彩色がみられるようになります。

腕輪形石製品の出土状態（川西町島の山古墳）
[奈良県立橿原考古学研究所提供(阿南辰秀氏撮影)]

耳環（奈良市狐塚横穴墓群出土）

復原された朱雀門

奈良時代の色彩

飛鳥・奈良時代になりますと、一通りの基本色が揃ったようです。「冠位十二階制」や「衣服令」にみられるように、位(くらい)や身分は、衣服や冠・腰帯の色で区別されるようになりました。「冠位十二階制」の冠の色は、紫・青・赤・黄・白・黒と考えられています。

寺院・宮殿の赤彩色　権威の象徴が、古墳から寺院・宮殿へ変わったことにより、赤彩の対象も、同様に変わりました。奈良時代の畿内地方では、墳墓や土器を赤色に塗ることはなくなり、かわって、寺院・宮殿の柱は、赤色に塗られ、白壁や緑色に塗られた連子窓(れんじまど)とともに華やかな色彩感を生み出しました。軒平瓦の下面にある赤彩は、瓦が葺(ふ)かれた後に柱が赤く塗られたことを如実に示しています。現在、私達が見ている平城京の寺院の姿は決して当時の色ではありません。薬師寺の東塔は、奈良時代から今日まで残っていますが、色彩から見れば、東塔の姿よりも、新しく復原された西塔の姿が当時の色を表しているのです。また、平成10年に復原された平城宮の朱雀門は、当時の色彩を表現しています。

なお、赤色顔料には、水銀朱、ベンガラに加えて鉛丹がみられるようになりますが、鉛釉陶器・瓦が作られ始めたことと関係があるかも知れません。

赤色顔料（ベンガラ）が付いた軒平瓦（平城京跡出土）

三彩丸瓦（平城京左京二条二坊十二坪出土）

施釉瓦　奈良時代には、色鮮やかな施釉瓦（三彩瓦、緑釉瓦）が葺かれる建物もありました。出土した施釉瓦には、建物の棟を覆う熨斗瓦・面戸瓦が目立つことや、寺院では垂木先瓦が主体であることから、屋根全体に施釉瓦が使用されていたものは少なく、縁取りの部分だけに限定されていたものが多かったと思われます。

平城京左京二条二坊十二坪では、680点もの三彩瓦の破片が出土しました。これは、ほかに例がない程、たくさんの出土量で、平城宮でもこれほどの三彩瓦はみられません。一つの坪全体を利用したこの敷地は、建物の配置や構造からみて、公的な機関があったものと推定されています。

施釉陶器（三彩）　飛鳥時代には、墓や寺から緑釉の棺台や磚が出土していますが、唐三彩が出土するのは藤原京が造営されてからです。奈良時代に入ると、唐三彩を模した三彩陶器、いわゆる奈良三彩の生産が始まります。緑・白・黄(褐)に彩られるだけでなく、ガラスのような輝きのある三彩陶器は、当時最も華やかな土器でした。平城京では、寺院から出土することが多いこと、薬壺形のものが多いことからみて、主に仏具として使用されたようです。また、小さな破片で出土することが多いのも特徴です。華やかなるゆえに、破片となっても使用されたのでしょうか。この頃になると、容器（うつわ）は、使用方法で種類が分けられる

三彩垂木先瓦（奈良市大安寺旧境内出土）

三彩陶器（平城京右京二条三坊十坪出土）

分銅（平城京左京九条一坊二坪出土）

だけでなく、色彩や輝きによって階級差が生まれてきたものと思われます。

また、仏像にも赤・緑など同様の彩色がみられます。

金・銀・銅製品　この時代の金・銀・銅の金属製品は、金銅仏、仏具など、そのほとんどが仏教に関するものです。平城京跡や寺院跡の調査では、佐波理（さはり）椀、銅箸、銅鏡（唐式鏡）、銅鈴などが出土しますが、いずれも大陸から持ち込まれたものや大陸の影響を受けたものばかりです。平城京跡から出土する金属器は、まとまって出土することはありませんが、寺院跡、特に大寺院の塔心礎（とうしんそ）の舎利荘厳具（しゃりそうごんぐ）や、須弥壇（しゅみだん）や基壇を造る際の鎮壇具（ちんだんぐ）として埋納されたものは、金属製品がまとまって出土します。

仏教に関するもの以外では、飾り金具や貨幣などがあり、奈良時代に鋳造（ちゅうぞう）された貨幣には、金銭、銀銭、銅銭があります。また、仏具とは考えがたい分銅（ふんどう）が、仏具によく使用される薬壺形であるのは、この時代の金属製品が仏具であることを象徴的に表わしているのかも知れません。

この時代は、中国の隋唐文化、仏教文化の影響で、多色で華やかに、きらびやかになったといえそうです。『万葉集』で「あおによし」と詠（うた）われた「奈良」、この「あおによし」とは、こうした多色で華やかな、きらびやかな色彩感を表現しているのではないでしょうか。

唐花六花鏡（平城京左京四条四坊五坪出土）

魚佩（平城京右京二条三坊三坪出土）

緑釉陶器（奈良市大安寺旧境内出土・北室町出土）

灰釉陶器（奈良市大安寺旧境内出土・大安寺町出土）

平安時代の色彩

平安時代は、容器（うつわ）に色彩の豊かさがみられます。この時代になると、三彩はみられなくなりますが、かわって「青瓷（あおし）」、「白瓷（しらし）」と呼ばれた、緑釉陶器、灰釉陶器が盛んに作られます。それに加え、中国からの青磁、白磁の輸入は、緑釉陶器、灰釉陶器の形に影響を与えます。また、金属器の影響を受けたものもあるようです。緑釉陶器・灰釉陶器は、形だけでも磁器・金属器などの高級品を指向して、模倣したものと思われます。舶来の陶磁器や金属器への指向は、器（うつわ）の種類や用途が替わっても、奈良時代から引き継がれてきたようです。

また、ロクロ成形で作られた白色陶器が加わりますが、これもまた、宮廷内などで使用された特別なものだったと思われます。「青瓷」は、緑釉陶器以外に中国からの輸入青磁を、「白瓷」には、灰釉陶器以外に白磁・白色陶器を加える説もありますが、やはり、数量的に出土量の多い緑釉陶器、灰釉陶器がふさわしいと思われます。

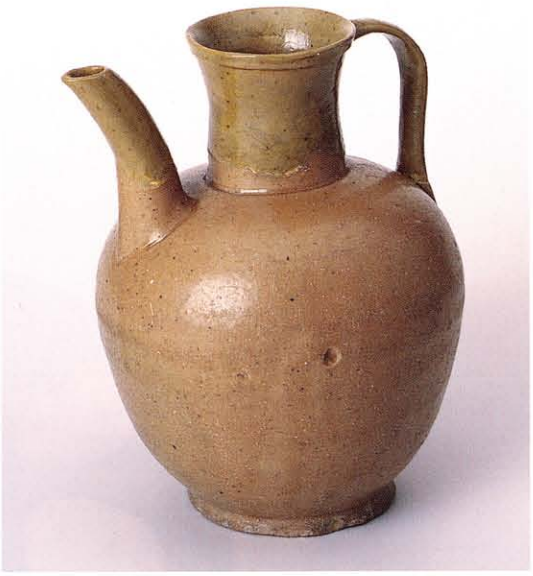
また、畿内ではこの頃になると、最初は土師器の内面に、ついで内外面に煤を付着させた黒色土器が盛んに作られるようになります。この漆黒の土器は、煤を付着させることによって、水漏れを防ぐだけでなく、当時貴重であった黒漆器を指向したものだったのでしょうか。

黒色土器（奈良市六条町・大安寺町・菅原町出土）

白色陶器（奈良市阿字万字町出土）

赤土器と白土器（奈良市奈良町遺跡出土）

青磁水注（奈良市東大寺旧境内出土）



中世・近世の色彩

中世には、平安時代よりも白磁・青磁の輸入量が増え、広く普及するようになります。また、新たに染付磁器（青花）も輸入され、漸次増加していくようです。

また、14～15世紀頃の奈良町遺跡では、「赤土器・白土器」と呼ばれる赤く焼かれた、または白く焼かれた土師器皿が大量に出土します。『多聞院日記』などの当時の文献には、当時の商業組合である座のなかに「赤土器座」「白土器座」がみられますので、意図的に異なる色に焼き上げたものと思われます。おそらく使用する粘土が含む鉄分の量によって違いが生まれるものと思いますが、どのような意図でこのような色の違いが生まれたのでしょうか。さかのぼって奈良時代の土師器にもこのような色の違いはみられるようですが、それがはたして中世まで継続していたのかどうかは、わかっていません。

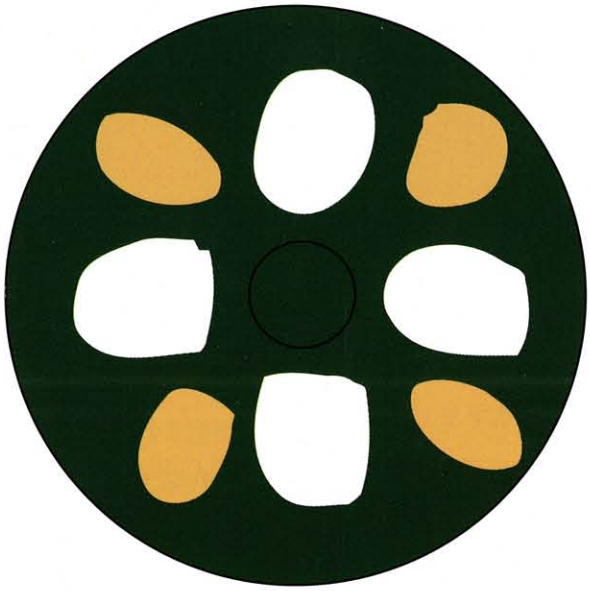
近世になると、絵紋様を付けた装飾性のある染付磁器、色絵磁器が国内で焼かれるようになり、専業化、交通路の整備、市場の拡大といった要因で、庶民にまで行き渡るようになります。そして、この流れをひく磁器が、近年まで「せともの」「からつもの」と呼ばれて、今でも日常的に使われていることは、私達のまわりを見れば、おわかりになることでしょう。

染付磁器（奈良市奈良町遺跡出土）

＜参考文献＞

・市毛勲 1975 『朱の考古学』雄山閣
・松田寿男 1975 『古代の朱』学生社
・前田雨城 1980 『色』（ものと人間の文化史38）法政大学出版局
・西本吉助・綿谷千穂 1991 『色はどうして出るの』裳書房
・本田光子・ほか 1998 「特集：考古資料としての赤色顔料」『月刊考古学ジャーナル』No.438、ニュー・サイエンス社
・田中琢編 1999 『日本の美術第400号 美術を科学する』至文堂
・仙台市富沢遺跡保存館編 2000 『赤彩の考古学』
・神戸市教育委員会編 2000 『色彩の考古学』

ほか



奈良三彩蓋の紋様

第19回平城京展

考古学・いろ・色

―出土遺物の色彩と輝き―

平成13年11月1日　発行

編集　奈良市埋蔵文化財調査センター

発行　奈 良 市 教 育 委 員 会

本書は、再生紙を使用しています。